

ANIC info



Association for
Nakano
International
Communications

中野区国際交流協会

2015
August

第1期日本語ボランティア突撃インタビュー 外国人と「日本語」で気軽にコミュニケーション!

日本に来て3か月、「にほんご」はむずかしいんです!
イベントレポート 野外交流「亀戸天神藤まつり& SKYDUCK」
大人気のボルトガル料理講習会

ボランティア活動と私

お知らせ (仮称)「地域国際交流カフェ」ボランティア募集
ネパール地震義援金のご報告/アニーとアニックに会いに来てね! /会員の皆様へ
「やさしいにほんご」で行こう! (おけいこそその1)



第1期日本語ボランティア突撃インタビュー

外国人と「日本語」で 気軽にコミュニケーション！

1989年中野区国際交流協会（以下 ANIC）の設立とともに始まった日本語講座。

様々な段階を経て27年目を迎えます。ボランティア経験豊富なお2人から、外国の方とのコミュニケーションを楽しむコツを聞いてみました。



日本語ボランティア、 こんなに長く続けていける とっていましたか？

平塚真理さん（以下、敬称略）：夫が転勤のある仕事だったので、いつか転勤すると思っていたら転勤せず、中野にずっと住んでいます。それで続きました。そのおかげで…（笑）

渡辺尚子さん（以下、敬称略）：私もやめることは考えたことがないです。一時他区にいましたが、いつかは戻ってくると思っていました。

平塚：そういう意味では、どこかへ引っ越しても、同じように日本語ボランティアをしていたと思います。

渡辺：同じことを教えていても、学習者

（※1）が違うと、相手の国や年齢も違う、それぞれに疑問が違うんです。教えているようだけれど、いろいろなものをもっています。こんな面白い体験は、なかなかできません。

鈴木：それはお国柄のこと、それとも個人によるものですか。

渡辺：国ではないです。個人ですね。やっぱりそれぞれの人間の魅力。

平塚：思いもよらない質問が飛んで来たり。日本語嫌いで雰囲気を出している人もいます。

渡辺：自分とは関係のないところで日本に来ることが決まって、「なんでここで日本語勉強しなきゃいけないんだ!？」って。特に子どもは強い拒絶反応を示します。心閉ざした学習者の気持ちをこちらに向かせるのは大変です。日本語学習を通して少しずつ言葉がわかるようになる。わかることが増えれば、気持ちが前向きになる。少しずつ心も開いてくれるようになります。笑顔を見せてくれた時は、本当にうれしく思います。

学習者が攻めてくる! ? 「学ぶ方も真剣、 教える方も真剣」

渡辺：学習能力の高い方には、こっちがやり込められたりすることがあります。一番怖かったのが、ものすごく優秀な学習者で、中山先生（※2）のことも初めは疑っていて…「あなたの言っていることは本当なの？」って感じで、納得しないとノートを開かないんです。たまたま、その人を私が担当することになりました。やっぱり、いっこうにノートは開かない。じーっと睨んでいる。そのうち「これはこういうことか」と確認されて、ようやくノートを開いてくれた。あのときの感激を私は忘れることができません。

鈴木：それは、何回くらい教えられてからですか。

渡辺：5～6回目ですね。冷や汗かきながら、教えていましたよ。また私が担

当した人ではないんですが、「意味が分からない!」って、ボランティアにモノをぶつける学習者もいました。その時思ったのは、やっぱり学習者も必死なんだと。日本で生きていかなければならない必死さから、そういう行動に出るんだと。だから教える側も、いいかげんな気持ちで教えるのは失礼だと痛感させられたきっかけになりました。

平塚：ボランティアっていう言葉の使い方も、国によって違うようで、西洋系の人に「仕事は何をしているの?」と聞かれて、「仕事はしていないけれど、ボランティアで日本語を教えている」と言ったら、「それは仕事よ」って言われたことがあります。ボランティアっていう言葉の捉え方が違うことが分かりました。これは仕事なんだ…、やる以上はしっかりやらないと!と思いました。

渡辺：ボランティアだから、そこまではできない…という声も聞きます。日本語は、日本語の分からない外国の方たちが日本で生活するための手段、私たちがいいかげんな教え方をしてしまうと彼らの生活に支障が出てきます。間違った教え方をしたら、恥をかくのはその人なんですよね。だから私たちは、日々スキルを磨いていく必要があります。日本での生活をより豊かなものにしてもらいたいという思いでやっています。



平塚 真理さん（ボランティア歴26年）

海外の駐在から帰ってくる人やこれから海外へ行く人の話を聞くうちに、外国の人との交流に興味を持ち、ANICの「日本語ボランティア実践講座」を受講。火曜午前クラスを中心に活動中。



鈴木 加奈（ANICスタッフ）



やさしい日本語が通じる

渡辺：日々の暮らしの中で思うことですが、日本人がちょっと視点を変えることで、外国の人はすごく暮らしやすくなると思うんですよ。ちょっとした言い回しをやさしく言うだけで、外国の方は「そういうことか!」。と分かることがあります。

平塚：大切なのは、①『です・ます』、②文を短く言う、③接続詞は使わない。例えば、「ここへ行ってから、これを買って…」と言うのではなく、「ここへ行きます。これを買います。」と区切って話す。日本人にとってはあまり教養のない文章に見えるかもしれませんが、そう話してあげると外国人にとっては分かりやすいんです。

鈴木：行動のひとつひとつをかたまりで言う! 「やさしい日本語」(※3)のことですよね。

平塚：ここ行って、あれして、こうで、ああで…となることを全部区切る。

渡辺：日本人どうして話すときも、「今話しているこのフレーズを外国の人にはどのように説明したらいいのかな」と普段から考えています。なんか癖になっていますね。

平塚：だいたい幼稚園より小さい子に説明するときのようなイメージですね。小さい子に、難しい言葉で言っても分からないですよ。 「どうやって話したらわかってくれるかな! ?」って。ある程度日本語を勉強した人なら、私たちが下手な英語や中国語で話すより、日本語で短く区切って話した方が通じます。

渡辺：学校の数学のテスト問題に全てフリガナがふってあるものがあります。日本語がわからない子どもたちにとって必要なのは読み方ではなく意味なのです。「商」は「わりぎんのこたえです」と言

われれば分かるんです。そういう視点に気が付いてくれる現場の先生がいらしてくれたらうれしいな…と思います。

鈴木：そういう子どもたちを受け持っている先生たちの研修会があるといいですね。

コミュニケーションのコツは「シンプルに話す!」

渡辺：日本語クラスとは全然関係ない集まりで、日本語ボランティアをやっていると話す事があります。そうすると「英語できるんでしょ」と言われる、「英語の分からない人に教えているんだけど…」と言うと、「え??? どうやって教えているの?」って。「日本語を日本語で教えるのよ」と答えると「この人は何を言っているの?」と思うようです。いろんな話をしていくと少し理解を示してくれるようになる。できれば外国の人には、やさしい言葉、簡単な言葉で、短く話をしてほしい…ということは、私もあちこちで言っています。日本語ボランティア活動をしている人たちが一人ひとり地道に、言っていくしかないのかな。

鈴木：短い文で話すというのは、特に慣れない人には分からないかもしれないですね。

平塚：ボランティアの中にも人によっては、とにかく詳しく言わなきゃ…と思う人もいます。

渡辺：誰でも、はじめは説明が長いんです。でも、ボランティアのスキルを上げる勉強会で指摘され、学習者に鍛えられながら、気づいていきました。気づくと劇的に変わります。既習の言葉だけを使って短い文でも説明できるようになり、文法用語を使う場面はほとんどなくなります。例文の出し方も変わってきますね。

平塚：そこに行くまでが、実は大変ね。
渡辺：文法用語で説明するのは簡単なんですよ。それをあえて使わずに、いい例文を。例文を見ただけで、学習者が何を学ぶかが分かるような究極の例文。説明がいらない。状況が目につかぶ。「こういう例文は、こういう時にしかつかわれないでしょ!」っていうような、そういう例文を見つけるのが大変。

平塚：例文がなにより。

渡辺：「こういう言い方もできます。ああいう言い方もできます。」っていうのは、絶対やってはいけない。自分の知識を全部出したいところですが、逆なんです。引き算。違いだけを教えていくんですよ。これは使いません! を教える。長年ボランティアをしていて見えてくるのは、はじめた当初は足し算だけど、長くやっているうちに引き算に変わってくるということです。

渡辺・平塚：だから、私たち本当はスリムになっていなくちゃいけないんですけどね(笑)。

(※1) 学習者：日本語を学びに日本語クラスに来ている外国から来た人たち

(※2) 中山先生：ANICの日本語講座ボランティア実践講座の講師。日本語講座の生みの親。現在も、ボランティアの指導に尽力を注ぐ。

(※3) やさしい日本語：阪神淡路大震災をきっかけに外国人を情報弱者にしないために生まれた考え。限られた語彙・文法を使って、短い文で話す。



渡辺 尚子さん(ボランティア歴26年)

1989年、ANICが実施した「外国人のための日本語講座」を新聞記事で見つけ、講座を見学。外国人に日本語を教える現場を見て圧倒されて…、縁あってテキスト、練習帳づくりに関わる。子ども日本語クラス(火・木)で活動中。

日本に来て3か月、「にほんご」はむずかしいんです！

区内の小中学校に通う外国の子どもは増加傾向にあります。3.11の東日本大震災の直後に減少しましたが、再び増え続けてきています。過去3年間で区内の8割以上の中学校、7割以上の小学校にANICから日本語指導員が派遣されています。これから減らないと予想されます。さて、現状は？

ここ数年、中国、フィリピン、ネパールからの子どもが転入している区立第五中学校を訪ね、先生方からお話をうかがいました。



池田俊一副校長（左上） 鳥井優先生（右上） 日本語を指導する坂本純子先生（左下） 司徒下琳さん（右下）

進路選択は大変？

都立高校の案内については英語や中国語など外国語版があるので、それを東京都に要望して取り寄せています。9月末には必要な部数が、東京都教育委員会から届くことになっています。

通常の三者面談をする点は、日本の子ども達と同じですね。入試などの制度については保護者と本人に丁寧に粘り強く指導していく必要があります。本人と話をし、ベストな方向に導いてあげられるよう取り組んでいます。

日本人の生徒にとってもプラスなんです！

学級単位でみても、集団の中に外国から来た子どもがいることで、思いやりの気持ち、協力し合う気持ちを、自然に持てるメリットがあるんです。みんなでその子のことを考える、その子と話したりすることそれ自体が外国の文化に触れることにつながるわけで、子どもたちにとっても貴重なことだと思います。

授業で「水泳」はないの？

Aさんは、日本に来て3か月。学校生活はいろいろな面で母国と違うので、戸惑うことも多いと思います。たとえば、Aさんの通っていた学校には、体育の授業で水泳はありませんでした。まだプールには一回しか入っていないと思います…。何事にも積極的な子なので、きっと泳ぎを楽しめるようになると思います。

個性によって、さまざま…

Bくんは、あっという間に日本の歌を覚えたりしました。テストについても、問題を理解できるので、自分の力でやっていけます。

自然と周りの子とのコミュニケーションも良好です。運動は嫌いではない。泳げないが、やり方を聞いてきて、泳げるようになりたいという意欲を感じます。

Cさんは、おっとり型で静かなタイプ。いつも笑顔でコミュニケーションをとっていると思っていたら、電話の時には上手な日本語で話していると担任の先生から聞きました。何事も地道

に努力しているようです。

漢字圏の国出身ではない場合は、苦労する！

Dさんは、バレー部に入りました。部活で一生懸命やっています。声も出していますね。漢字の国出身ではないので、日本語を身につけるうえでの困難さはあると思います。実際の日本語の勉強もゆっくりやっています。2年なので、ゆっくり見守りたいところです。

日本語はむずかしい！

道徳の授業で、読み物を読ませて、質問する、書かせる、というような場合、伝わっているかな？と言葉の壁を感じますが、クラスみんなでフォローしています。

授業以外では、伝えなければいけないことをどう伝えるかが、難題。たとえば、友だち関係の距離感やバランスなどをじょうずに伝えられれば、コミュニケーションももつとうまくいく場合があるけれど、細かいニュアンスを伝えるのはなかなか難しいです。

2120人 すごく少ない？

記者のひとりごと

- ★学校での日本語指導の時間数は、60時間だそうです。60時間という…たとえば、初めてフランス語を学ぶ人が毎日2時間勉強して、1か月で、フランスの中学校の授業についていけるか…ということ？これは、自信がないなあ。あなたは？
- ☆聞いたところでは、外国から来た子どもも、水着を買う場所が分からないので、ANICの子どもクラスのお友達がサポートしていることもあるようです。
- ★保護者より子どもの方が、学校制度のことなどよく知っている場合が多いようです。外国から来たお母さん、お父さん頑張ってください！
- ☆外国の子どもが入ると先生の負担も大きいけれど、クラスの子どもたちにとっては、国際交流の始まりでもある。プラスの面も大いにありますね。
- ★見出し「2120人」の意味…2014年度ANIC「子ども日本語クラス」に通ってきた子どもたちの延べ人数です、すごく少ない？

イベント レポート

野外交流「亀戸天神藤まつり & SKY DUCK」

4月25日(土)に、ボランティアグループ金曜ボランティアの企画で亀戸まで出かけてきました。中国・韓国・スペインの外国の方を含め総勢25人で楽しみました。始めにスポーツの神様が祀られている香取神社を参拝。そこで全員が簡単な自己紹介をして、好きなスポーツや得意なスポーツを一人ひとり話しました。

次に水陸両用バス「SKY DUCK」に

乗車しました。参加者が一番楽しみにしていたこのバス、陸から川に飛び込むときにはみんなで「スカイダック!」と叫び、水の中へザブン。とても楽しいガイドさんが、みんなを盛り上げてくれました。

最後にメインの「亀戸天神」へ行き、藤まつりを楽しみました。たくさんの屋台が出ていてとても賑わっていました。藤の花も7分咲きぐらいで香りもとてもよかったです。



大人気のポルトガル料理講習会

6月19日(金)、ポルトガルの首都リスボン出身のカタリナ・ビトリノさんを講師に迎え、沼袋にある障害者福祉会館で料理講習会を開催しました。アレンテージョ地方の豚肉とあさりの煮込み・ジャガイモのソテー・タコのサラダ・ガスパチョ・スイートライスの5品をつくりました。

アレンテージョ地方は、リスボンの南側の地方で、カタリナさんのお父様の出身地です。その地方の家庭の味を

教えていただきました。豚肉とあさりを混ぜて煮るといふ発想はとても新鮮で、様々なスパイスの香りと仕上げのコリアンダーの香りが会場に漂っていました。

ポルトガルというと、「カステラ」「こんぺいとう」など伝わってきた言葉を思い浮かべますが、「ビョウブ」「バンザイ」など日本からポルトガルに伝わった言葉もあるそうです。お料理だけでなく、そんな文化のつながりも感じた講習会でした。



ボランティア活動と私

金曜ボランティア 姚一 (よういち)

大学卒業後、私は一人で来日しました。できる限り早く日本の生活になれるように頑張りたいと思っていましたが、誰も知らない、誰とも話せない環境で、正直不安でした。そのとき出会ったのは、中野区国際交流協会(ANIC)でした。

はじめてANICに行った時、担当者からいろいろ案内されました。わからない言葉や内容など、親切に説明してくれる担当者の姿、今でも忘れません。その日のミーティングでは、何もかも恥ずかしくて、事前に準備した自己紹介ぐらいでもうまく話せませんでした。ボランティアの皆さん本当に優しく、いろいろと励ましてくれ



旗を持っているのが本人

ました。私にとって、それからのボランティア活動がすごく楽しみでした。

初めての活動は野外交流でした。場所は私が日本語を勉強しはじめたとき、教科書に出てきた「上野公園」でした。本当に夢みたいで、上野公園はもちろん、日本最初の動物園と言われた上野動物園も観光しました。日本、韓国、中国からの方と交流できて、本当に楽しい時間を送ってきて、大変満足でした。

7月のイベントは「わくわく大作戦」でした。私にとって、今回のイベントは今までで一番勉強になったと思います。周知のように、日本は地震多発の国で、防災の知識はもちろん、実践の訓練も大切だと思いました。消火器の使い方や地震が起きたときの注意事項など、いろいろ実践できて、とても有意義な時間を過ごしました。

11月のイベントは国際スポーツ交流で、私は初めて担当者として活動しました。ルールの設定、チラシづくり、スケジュールの確認など、ボランティアたちと何回も打ち合わせをしました。あにく当日は雨でしたが、70人以上の方が参加くださって、本当に感動しました。私にとって、本当に貴重な経験だと思います。将来、ど

んなことをやっても、責任を持って、最後までやりぬくことの大切さを学びました。

大学院の二年間では、学業と就職活動に集中していたため、ボランティア活動に参加する時間がなくなってしまいましたが、ANICは私にとって特別な存在であるため、大学院を卒業した後、私は中野区に戻りました。

復帰する最初のイベントは中野区ランニングフェスタでした。2km×5の試合で、ボランティアのみなさんは一体となって、練習よりはるかによい成績を獲得しました。

将来、私は日本で働く予定です。これから忙しくなるかもしれませんが、できる限りボランティア活動を続けて行きたいと思っています。今までの自分の人生を振り返ってみると、ANICとの出会いがなければ、今の私がいけないと言っても過言ではありません。私にとって、今までのボランティアの経験がお金では買えない宝物になります。いつも私のことを心配してくださるANICのスタッフおよびボランティアの皆さんに本当に感謝しています。これからもボランティアとして、誇りを持って、日本で頑張りたいと思っています。

おしらせ

(仮称) 「地域国際交流カフェ」 ボランティア募集

ANIC では、みなさんの身近な場所で国際交流カフェをスタートしようと準備中です。このカフェと一緒に企画運営して下さるボランティアを募集中。外国人の方と知り合いたい、サポートしあいたいと思っているのに、きっかけがつかめずにいる方、一緒に交流を初めてみませんか。

日時：9月12日(土) 10:00～11:30
場所：なかのZERO 西館 3階
対象：どなたでも
申込み/問合せ：電話、メールで ANIC まで

ネパール地震 義援金のご報告

中野区には現在約 800 人のネパールの方が暮らしています。中国、韓国・朝鮮、ベトナムに続き 4 番目に多いのがネパールの方々。ANIC の日本語講座にもたくさんいらっしゃいます。4月25日に発生したネパール大地震の後、義援金を募集しました。5月11日から29日の間で46,248円が集まり、6月3日ネパール大使館へ寄付しました。皆様の温かいご支援ありがとうございました。被災地の一日も早い復興をお祈りします。

アニーとニックに 会いに来てね!



ANIC のゆるきゃらアニーとニックを、南台5丁目在住の原さんがつくってくださいました。つぶらな目と角が、かわいいですね。一枚一枚紙に色を付けて、折って組み立てられています。中野区役所内の福祉売店にも、仲間がたくさんいますよ。

会員の皆様へ

今年度も賛助会費によるご支援を賜りありがとうございます。この4月より新規会員となってくださった皆様にも感謝申し上げます。ANIC は会員の皆様とともに地域の多文化共生社会の実現のため全力を尽くして参ります。今後とも、ご支援、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。



「やさしいにほんご」で行こう! (おけいこ その1)

外国の方をサポートしたいけど、「英語?中国語?無理、無理できないよ…」と思っているあなた。大丈夫です。「やさしいにほんご」で、話してみましよう。

- 次の文章を、「やさしいにほんご」に訳してみよう。まずはチャレンジしてみてね。

〈ANIC の概要〉

中野区国際交流協会は、中野区と外国都市の交流に資するとともに、区における区民レベルの国際交流事業を促進し、友好、親善の機運を醸成し、もって国際相互理解と国際親善を図り、世界平和の維持に貢献することを目的としています。

- 「やさしいにほんご」に訳すようになります。わかりやすいでしょう。

〈ANIC は 何を しますか〉

中野区は 外国の 都市と 仲良く しています。それで、中野区国際交流協会は、色々 手伝います。そして、中野区の 日本と 外国の 人たちが よく 知って、仲良くなる ように 色々な ことを して、ずっと 平和で いる ことが できるように します。

編集後記

中野区国際交流協会だよりの名称を改め、「ANIC info (あにつく いんぷお)」とし、設立27年目に初めてカラーにしてみました。いかがでしょうか。見やすい紙面づくりを心掛けていきたいところですが、何分カラーに不慣れな私たちスタッフ。悪戦苦闘の連続でしたが…。今まで ANIC を知らなかった方にも、お手にとっていただけたらと思っています。



次回の協会だよりは、11月1日の発行予定です。